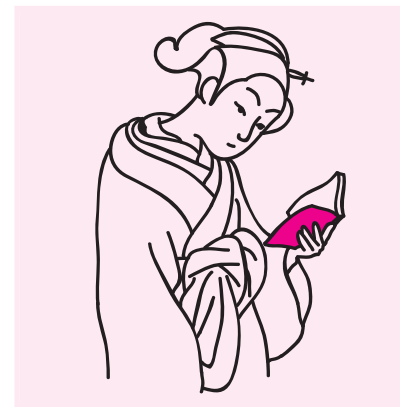




本を読もう！

第5集 きみたちに読んでほしい本を2冊あげると



和光大学の先生たちに
いま、きみたちに読んでほしい本を選んでもらった。
これはその第5集。

先生たちが紹介するのは2冊。
自身の研究分野から1冊、自由に選んだおすすめの本を1冊。

「あの先生の授業おもしろいし読んでみようか」
「へえ、普段こういう本を読むんだ」など
パラパラと、お顔など眺めながら見てみてほしい。

「和光には、いろんな専門分野の先生がいるんだなあ」
と、あらためて先生や授業の個性に気づくのもよい。

本とわたし、先生とわたし。
この冊子が、2つをつなげるきっかけになったらうれしい。

作家と同時代を生きる

加藤 巖

和光大学附属梅根記念図書・情報館館長

30 数年前、大学院生だった僕は、毎日、図書館にこもっていた。ある日、若手研究者たちの著作を見つけた。暑い日だった。僕は床にペタリと座り込んで読み始めた。2 人の米国人研究者が 20 代で発表した数本の論文だった。

衝撃だった。自分とあまり年齢の違わない研究者がこれほど凄いことを考えていたのか！それからは、彼らの著作が出るたびに読むようになった。少しずつ、彼らの巧みな論旨展開を面白がりながら、以前よりも深く吟味できるようになっていった。

いま振り返ってみて思うのだが、少しでも近付けるようにと恋焦がれながら、彼らの著作を読み続けたことが、僕を成長させてくれた。僕は、2 人の優れた書き手と同時代に生きていることに感謝している。

教員になってから、あるベテランの先生からお誘いを受けた。それは「今度、アメリカから友人の〇〇博士が日本に来るから、一緒にご飯を食べようよ」だった。30 年前に衝撃を受けた著者の 1 人だ。お会いした際は、嬉しくて目眩がした。

ここまでの話は、研究者だけの話ではないはずだ。もし、好きな小説家や歴史家が作品を送り出し続けてくれるならば、それは人生の幸運の一つだ。

皆さんにも、作家と共に生きる醍醐味を味わってほしい。そのために、まずは読んでみたいと思う本を見つけてほしい。この冊子『本を読もう！』第 5 集を活用してくれたら、とても嬉しい。また、これまでに発行された第 1 集から第 4 集も併せて参照してほしい。

作家と同時代を生きる人生の幸運があなたにもやって来ますように！

きみたちに読んでほしい本を 2 冊あげると

目次

現代人間学部

心理教育学科		現代社会学科	
一瀬 早百合	6	馬場 淳	11
岩本 陽児	6	米田 幸弘	11
菅野 恵	7		
熊上 崇	7	人間科学科	
高坂 康雅	8		
坂井 敬子	8	制野 俊弘	12
末木 新	9	堂前 雅史	12
辻 直人	9	野中 浩一	13
富樫 千紘	10	原田 尚幸	13
韓 仁愛	10		

表現学部

総合文化学科		芸術学科	
浅見 克彦	14	大坪 晶	18
上野 俊哉	14	倉方 雅行	19
加藤 三由紀	15	近藤 忠	19
小関 和弘	15	佐藤 勲	20
坂井 弘紀	16	佐藤 克久	20
津田 博幸	16	世利 幸代	21
長尾 洋子	17	詫摩 昭人	21
名嘉山 リサ	17	野々村 文宏	22
松村 一男	18	畑中 朋子	22
		半田 滋男	23
		松枝 到	23

経済経営学部

経済学科		経営学科	
伊藤 隆治	24	井出 健二郎	29
伊東 達夫	24	上野 哲郎	29
稲田 圭祐	25	鈴木 岩行	30
加藤 巖	25	當間 政義	30
齋藤 邦明	26	バンバン・ルディアント	31
徳永 貴志	26	平井 宏典	31
半谷 俊彦	27	福田 好裕	32
樋口 弘夫	27		
日臺 健雄	28		
和智 達也	28		



*専任教員の一部（53名）の寄稿となります（2020年3月時点での学科名・所属）

『うるさい日本の私』中島義道
角川文庫

電車に乗れば電子掲示板に最新ニュースが流れ、丁寧すぎる乗換情報や1～2分の遅延を長々と詫びるアナウンスが入る。乗客を目にするとうつむいてスマホ画面からの情報を読み込みながら機器と「対話」している…。日本の日常的でありふれた光景であるが、視覚過敏、聴覚過敏で情報や刺激が多いと疲弊しやすい私にとって、これらは異様な光景にうつるのである。哲学者・中島義道による本書は、日本の「騒音文化」を暴力性にとらえたエッセイである。1996年の話題作であるが、ICT（情報通信技術）の発展で「情報過多社会」を迎えた現代社会を予知し、警鐘を鳴らしているようにも思える。

『子どものトラウマ』西澤哲
講談社現代新書

心の傷、いわゆるトラウマは誰でも抱え、これからもトラウマに苦しむ可能性はいくらでもある。大人であれば傷つかないように逃げたり正当化するなどしてしのぐ（対処する）ことができるのであるが、子どもだと衝撃的な体験にうまく対処できず、心の中心部へトラウマが入り込み、その体験が「瞬間冷凍」されるため周囲にも気づかれにくい。やがて「瞬間冷凍」されたトラウマが、「解凍」されたときにフラッシュバック現象を起こし、心身の不調をきたすのである。本書は、目に見えないトラウマをわかりやすく解説している。児童虐待による影響だけでなく、我々が心の危機に立ち向かうためのヒントを与えてくれる。



心理教育学科

KANNO KEI
菅野 恵

児童心理学

『フタバから遠く離れて』船橋淳
岩波書店

皆さんは、「フタバ」がどこにあるか知っていますか？福島原発があったところです。原発事故により帰還困難区域に指定された双葉町の町民は、事故から8年経った今も、故郷に、自宅に戻って暮らすことはできません。本書は双葉町民が、福島県から埼玉県加須市の廃校になった高校への避難生活が描かれています。映画、DVDもありますので、ぜひご覧になってください。故郷を追われ、見知らぬ町で長期間生活しなければならない生活の辛さが、現在の日本でまだ続いているのです。私のゼミでは、年2回、双葉町民の方々と交流し、避難生活の大変さやその中で生きることを教えていただいています。皆さんも双葉町の人々と語り合いませんか。

『誰もボクを見ていない: なぜ17歳の少年は、祖父母を殺害したのか』山寺香
ポプラ社

17歳の少年が、祖父母を殺害した実際の事件の記録です。司法犯罪心理学や少年事件に興味のある学生は、ぜひ読んでほしいと思います。なぜ、少年が殺人事件を起こしたのでしょうか？少年は刑務所に入れて厳罰にすべきなのでしょうか？本書を読み進めていくと、複雑な事情があらわれます。実は、少年は母親から祖父母への殺害を指示されていました。断ればいいのに、と思うかもしれませんが、少年は幼少期から虐待を受けて、心理的に無力な状態に陥っていたのです。これを心理学用語で「学習性無力感」といいます。少年を責めるだけではなく、悲惨な事件を防ぐにはどうすれば良いか、本書を読んで語り合しましょう。



心理教育学科

KUMAGAMI TAKASHI
熊上 崇

司法犯罪心理学
発達障害心理学

『老いと幼なの言うことには』小沢牧子、エリザベス・コール
小澤昔ばなし研究所

この本は写真、対談、エッセーと複数の形態で構成されている。「生と死」を心理学者である日本人の「姑」と写真家で米国人の「嫁」が共著で、年代・文化・地域の多様性を縦横無尽に表現している。特に印象的なのは、ペルーやバングラデシュで暮らしている大人や子どもの凜としたまぎしの写真である。文章と共に人間の立っている地面に足をつけて暮らしている豊かさや美しさをみごとに見せてくれる。「老いと死」「葬送と再生」そして「誕生と育ち」という生物としての当たり前の営みを大切にすることを押すつけがましくなく、思い起こさせてくれる一冊である。著者の小沢牧子は和光大学の元非常勤講師である。

『鳥類学者だからって、鳥が好きだと思ふなよ』川上和人
新潮社

一読して、「抱腹絶倒」と墨書して軸装したい気分になった本。著者はどんな人だろうと思っていたら、19年度のサバティカルで小笠原村に滞在中、宿舍を共にする機会に恵まれた。いやすごい。本書から引用しよう。「日本鳥学会の会員数は約1200人。『日本タレント図鑑』に載っているタレントまたはモデルの数が1万1千人。学会員が全員鳥類学者だとしても、タレントより希少なのだ。日本の人口を1億2千万人とすると、10万人に1人。つまり、10万人の友達を作らないと鳥類学者とは仲良くなれないのである。」ぼくの所属する日本社会教育学会は会員数900名弱。人口14万人に1人の割合だ。従って著者には、友達が14万人いると思われる。

『自己への物語論的接近: 家族療法から社会学へ』浅野彦彦
勁草書房

「自己」とは何か。この命題は多くの先人たちが、また現代の哲学者たちが取り組み続ける難題である。本書ではこのテーマに「物語」という考え方をを用いて社会学者がアプローチしている。「物語」論についての解説はさておき、結論を簡単に述べるとすれば「自己」とは、自分自身が何者であることを説明することを通して産み出されるものである。私たちが「自分自身を説明する」という営みは、他者に対しても時には自分自身にも求められる場合があるだろう。学術的な研究を押えた理論展開は難解でもあるが、読み終えた時には爽快感すら感じる一冊である。



心理教育学科

ICHISE SAYURI
一瀬 早百合

社会福祉学
児童福祉学
ソーシャルワーク



心理教育学科

IWAMOTO YOHJI
岩本 陽児

社会教育学・生涯学習論
基礎教育保障学

『硫黄島: 国策に翻弄された130年』石原俊
中公新書

戦後75年の節目の年だ。しかし今もって、旧住民が帰れぬ故郷が日本に6か所あることを、きみは知っているだろうか？ロシアが占領・支配する北方四島、それから硫黄島（いおうとう）と北硫黄島である。国境の島では、「冷戦」が終わっていない。硫黄島が大戦末期に日米の激戦地となり、日本守備隊全滅、米軍にも多くの死傷者を出したことは余りに有名だ。しかし戦争末期の「強制疎開」で千名以上が離島させられるまで、硫黄島村・北硫黄島の北村では、ごく日常の生活が営まれていた。日本国民として、記憶に留めたい事である。失われた暮らしについては、島生まれの青野正男『小笠原物語』をあわせ読みたい。切ないぞ。

『居るのはつらいよ：ケアとセラピー
についての覚書』東畑開人
医学書院

この本をどのような視点から紹介することが適切なのか…そのように感じさせてくれるほど、色々な刺激に飛んだ本で、おそらくは読者の立場が違えば、それぞれに得られるものがあるだろうと思います。例えば、少なくとも、この冊子を読んでいる心理職を将来の夢（の一つ）に考えている高校生であれば、若手の心理職がどのような生活に追われることになるのかを具体的にイメージすることができははずです。あるいは、こころを治療するとか、こころをケアするということがどのようなことなのか、少しはイメージがつかめるかもしれません。それに加え、単純に面白い青春小説でもあり、学術図書にもなっています。

『「死」とは何か：イエール大学で23年
連続の人気講義』シェリー・ケーガン
文響社

私自身は自殺に関する研究を専門としている心理学者です。「自殺予防を専門としている」とよく紹介されるのですが、少し居心地の悪い思いをしています。というのは、自殺が予防すべき現象かどうかは、必ずしも自明ではないからです。人間は今の科学技術水準では必ずいずれは死すべき存在であり、その形式は色々ありますが、おおきくは、病死、自然死、事故死、他殺、自殺に分けられます。自殺は死の一形態であり、我々が自殺を含めた死という現象に対してどのような態度で接するべきか、ということを考える際には、哲学的な思考が必要となります。本書は、我々が死についてどのように接するべきか再考する機会を与えてくれます。

『青い鳥』重松清
新潮文庫

吃音の村内先生が、様々な「悩み」「悲しみ」「葛藤」を抱える中学生と向き合い、彼らの心を受け止めていく8つのストーリー。ここには多感な中学生の内なる声、リアルな思いが描かれている。村内先生は吃音であることで生徒から馬鹿にされることもあるが、助けの必要な生徒にさりげなく近寄って声をかけ、生徒を慰め諭す。その言葉は表面的でない。「本気のこと」を心からの言葉で語りかけ、彼らの言葉にならない気持ちを受け止めようとする。教師の役割について深く考えさせてくれる作品。教師を目指す人には、一度とは言わず読み返してほしい。映画化もされている。

『あるリベラリストの回想：湯浅八郎
の日本とアメリカ』
同志社大学アメリカ研究所編
日本YMCA 同盟出版部

湯浅八郎とは、1935年から37年と1947年から50年の2度にわたり、同志社総長を務めた人物で、その後国際基督教大学初代学長も務めた。湯浅は中学校（旧制）を卒業後18歳で単身アメリカに渡ってしばらく農場で働き、その後イリノイ大学大学院で留学生らとの交流を深めて国際感覚を身に付けた。しかし日本帰国後は狭い愛国心に偏った軍部と激しく対立して総長辞任に追い込まれ再度渡米、そこで太平洋戦争が起きてしまう。戦後になって帰国した時、今度は新たな民主的社会の実現を担う指導者として迎えられた。時代に翻弄されながらも、信念を持って生きるその生き方から、現代の我々は学ぶことは多い。



心理教育学科

SUEKI HAJIME

末木 新

自殺学
心理学
臨床心理学



心理教育学科

TSUJI NAOTO

辻 直人

教育史・教育学

『ままならないから私とあなた』
朝井リョウ
文春文庫

「レンタル世界」と「ままならないから私とあなた」の2作品が収録されている。いずれにも共通しているのは「間（ま）」、つまり適切な距離感というものである。自分と他者とは違う存在である。これは当たり前のことであるが、親しい人との関係になると、ついこの当たり前を忘れてしまう。自分と相手は同じ考えをしていると思い込み、あたかも一体であるかのように距離を詰めてしまう。しかし、詰めた先に待っているのは、まったく違う他者である。知らなくても良いことがあり、言っただけいけないこともある。本書はこの距離感の駆け引きにうずうずしながらも、ついつい一気に読み進めてしまう一冊である。

『人はなぜ物語を求めるのか』
千野帽子
筑摩書房

私たちは、次々と生み出され表現されるストーリーや物語に絶えず触れています。そうして、他者や世界を理解しています。自分自身を理解するときでさえもです。この書籍の序盤では、その解説が丁寧に行われています。中盤以降では、ストーリーや物語の落とし穴について説明がなされます。それらは、客観的／科学的に正しかったり妥当であったりとは限りません。それにもかかわらず、私たちは、意識の中にある情報について、自動的に、ストーリーや物語の枠をはめて理解してしまうという癖を持っているのです。ストーリーや物語が、人を幸福にも、不幸にもする。こうした呪縛から自由になるためにも、ぜひ読んで欲しい書籍です。

『変貌する恋愛と結婚：データで読む
平成』小林盾、川端健嗣編
新曜社

平成という時代は、「失われた20年」と称されるように経済の低迷期であった。それとリンクするかどうかはわからないが、恋愛の低迷期であったとも思われる。草食系（男子）という言葉が広まり、恋愛に関心を持たない若者が増えたといわれる。しかし、実際にそうなのだろうか？恋愛をしないことは悪であり、恋愛をしたら幸せになれるのだろうか？ そんな素朴な疑問に1万2000人というデータで答えてくれるのが本書である。本書には、恋愛と結婚に関する「今の状態」があり、また恋愛と結婚に関する研究のネタが豊富に詰まっている。これらデータに対して「本当？」と疑問を投げかけながら読んでみると、新たな発見があるかもしれない。

『採用学』服部泰宏
新潮社

この書籍は、採用という場面を、アカデミックに気持ちよく斬ってくれます。就職情報サイト、曖昧な選抜基準などによって、就職／採用活動がどういう影響を受けているのか。企業の採用活動はどう変化してきており、また、どう変化していくべきであるか。その説明は非常に説得力があります。この書籍が想定している読者は、企業やその採用担当です。でも私は、あえて学生のみなさんに、読んでもらいたいと思います。これを読めば内定が得やすくなるというわけではありません。そうではなく、今ある慣例・慣習に疑問を持ち、問題の所在を検討し、改善の策を立てるというアカデミックな活動の価値を、知ることができると考えるからです。



心理教育学科

KOSAKA YASUMASA

高坂 康雅

青年心理学



心理教育学科

SAKAI KEIKO

坂井 敬子

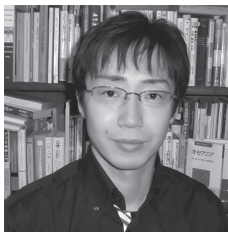
キャリア心理学
産業・組織心理学

『情報生産者になる』上野千鶴子
ちくま新書

私たちは日頃サイバースペース上の情報を享受＝消費していますが、著者の上野さんは「情報生産者の方が何倍も楽しい!」と喝破します。では、どうすれば情報生産者になれるのか。本書では、著名な社会学者であり、多くの秀逸な研究者を輩出してきた上野さんがこれまでの経験をもとに知的生産の技法を体系的かつ余すところなく教えてくれます。問いの立て方からアウトプットまでのプロセスと方法が順を追って紹介されているので、研究者を目指す人にはもちろん、高校までの「勉強」と大学からはじまる「学問・研究」の違いを理解するうえで、またゼミでの発表や卒業論文に取りかかるうえで、格好のテキストとなるでしょう。

『ヴィータ：遺棄された者たちの生』ジョアオ・ビール
みすず書房

人類学者のビールは、ブラジル南部のある保護施設で、歩くことすらままならず、訳のわからないことをしゃべる精神病患者のカタリナと出会い、彼女の言葉に真摯に向き合いながら、やがて真の病名をつきとめていきます。読者は、その謎解きのような展開のなかで、国家、医療、家族がカタリナのような人々を狂人に仕立て上げ、社会的に捨てていくおぞましい事実を目の当たりにすることでしょう。その一方で、ビールとの交流は、カタリナにとって、自分から奪われた世界とのつながりや人間の尊厳を回復していく過程でもありました。本書から、ネオリベラリズムがはびこる現代世界でのフィールドワークおよび民族誌の意義を感じ取って欲しいと思います。



現代社会学科

BABA JUN

馬場 淳

社会人類学

『日本人はなぜ戦争へと向かったのか：外交・陸軍編／メディアと民衆・指導者編／果てしなき戦線拡大編』(全3冊) NHK スペシャル取材班 新潮文庫

かつての日本がなぜ戦争へと向かってしまったのか。その理由を解明する興味深い研究が今世紀に入ってからも次々に出ている。本書は、NHK スペシャルの放送内容に加え、研究者達へのインタビューが充実しており、多様な知見を手っ取り早く学べるので便利だ。「軍部の暴走に引きずられた」「開戦に反対できない空気があった」「リーダーが国際情勢を把握できていなかった」等のよく言われる理由も間違いではないが、それだけでは片付けられない厄介な問題があったことがわかる。まるで日本社会の「組織病理あるある」の見本市のようだ。本書を読んで、これは過去の話ではないし他人事でもないと身につまされる思いがするのは、私だけではないはずだ。

『民主党政権失敗の検証：日本政治は何を活かすか』日本再建イニシアティブ
中公新書

自民党に対抗しうる政党となることを期待されていただけに、民主党政権の「失敗」に対する有権者の失望は大きく、批判も厳しい。だが、民主党政権を担った政治家の経験不足や能力不足だけに失敗の原因を求めているは本質が見えない。これは単なる「民主党の失敗」ではなく、日本の政治の失敗でもある。「政権交代可能な二大政党制」を目指して1990年代から20年かけて推し進めてきた「政治改革の失敗」なのだ。英米型の二大政党制を理想化し日本に当てはめようとしたことの是非も含めて、この20年間の経験を見つめ直す必要があるだろう。本書の多角的な分析を読めば、民主党政権の蹟きの背後にある、日本の政治の構造的な課題が見えてくる。



現代社会学科

YONEDA YUKIHIRO

米田 幸弘

社会学

『3月のライオン』羽海野チカ
白泉社

「自立」って何でしょう。自分のことを全部ひとりでできることだと思いますか？この物語は、中学生でプロ棋士になった主人公・桐山くんの「自立と共生」の物語です。プロになって、育った家を出て、一人暮らしを始め、高校生活を始める。そんなところからこの物語は始まります。「一人で立とう」として暮らし始めた彼は、偶然知り合った川本家をはじめ、先生や棋士仲間との関わり合いの中で、「誰かに頼る」こと、そして「頼られる」ことを繰り返しながら、「自立」をしていく…そんな物語だと、私は読みました。はじめの問いに戻ります。「自立」って何でしょう？桐山くんの暮らしを見ながら、考えてみませんか？

『わたしはマララ：教育のために立ち上がり、タリバンに撃たれた少女』マララ・ユスフザイ、クリスティーナ・ラム
学研パブリッシング

2012年10月9日15歳のマララ・ユスフザイはタリバンによって銃撃を受け、生死をさまつたのちに生還する。男女差別と生命尊厳が保障されない社会の中で、女の子に教育を受ける権利や非暴力を訴え続ける最中のことであった。2013年国連演説では教育の権利について世界に向けて発信し、2014年には18歳で史上最年少ノーベル平和賞を受賞する。本書にはマララの信念が生まれる家庭的及び社会的な背景が具体的に叙述されている。テロにより死にかけた出来事は一層マララを「弱さと恐怖と絶望が消え、強さと力と勇気が生まれたのです。」と、信念に生き抜くパワーを与えることになる。若いみなさんにはマララの信念に生き抜く姿から、「何のために生きるか」について、改めて考えていただきたい。

『「学校」をつくり直す』苫野一徳
河出新書

学校教育の目的とは何だと思いますか？また、学校ってなんでこんな風なんだろう？と疑問に思ったことはありますか？この本は、いじめ・体罰、小1プロブレムなど、今学校が抱えている課題の原因は一体どこにあるか、という問いからはじまります。そして、その課題の原因が「みんなで同じことを、同じペースで、同じようなやり方で」という画一的教育システムにあるのではないかと指摘していきます。では、子ども一人ひとりの学びをどのようにしてつくっていくのか？その考え方が語られています。「学校」の目的やあり方とは何か、みなさん自身の体験と重ねながら、これからの学校づくりを考えてみるのにぴったりの一冊です。



心理教育学科

TOGASHI CHIHIRO

富樫 千紘

教育経営学



心理教育学科

HAN INEI

韓 仁愛

乳児保育の歴史

『遊びこそ豊かな学び：乳幼児期に育つ感動する心と、考え・表現する力』今井和子
ひとなる書房

近年、乳幼児への教育的な働きかけが強調される中で、子どもにとって「教育」、または「学び」とはどのようなものなのかが話題になっている。子どもの学びは、子ども自らの「しりたい」「なんで?」「やりたい」などの興味や好奇心から発生する。大人とは違う特有のセクターとして「遊び」があり、そのきっかけや育ちの過程に自発的な「学び」が生まれる。
長年保育の実践者として子どもの言葉をはじめ、保育のあり方について追究してきた著者が、実際の実践事例を通して遊びの意味を位置付けている。乳幼児期において遊びがいかに大事なのかを確認できる一書である。

『とりばん』とりのなん子

講談社

私は鳥が好きになった。それも、50歳を超えて初めて鶴見川の翡翠に出会ってからの、にわかナチュラリスト志願生である。最近の学生さんは文字の文章を忌避する人も増えた気がするが、「本」を読もうという企画で、日本のコミックを取り上げないのもまた時代遅れだろう。私も『言の葉の庭』（新海誠）の映像表現には感服した口だが、そのノベライズ版の文字表現のほうがさらに大きく響く、古い人間ではある。そういう人間からしても、このシリーズ作品は、鳥たちの姿が上品にコミカルに表現されているだけでなく、第〇「羽」と表現されている各回の最後のページに、ときどきふつと呟かれる言葉が印象的で味わい深い。自然を全身で呼吸するお手本。

『佐々木敏のデータ栄養学のすすめ：氾濫し混乱する「食と健康」の情報を整理する』佐々木敏

女子栄養大学出版部

疫学は元来、感染症を扱う学問であり、新型インフルエンザが出現すると、その専門家が第一線に出る。しかし、疫学研究は慢性疾患も標的にするようになった。健康に生きていくには、脂肪を控えよ、タバコは吸うな、酒はほどほどに、睡眠も大事、運動も適度などと、小うるさいこと甚だしいが、多くは疫学研究の成果による。自分の人生くらい好きにさせてよ、他人には迷惑かけないから、というほうが個人的には友だちになりたい。それでも、「〇〇を食べてぐんぐん視力回復！」という宣伝文句にあっさり釣られるようでは少々不安もある。佐々木氏は栄養疫学では日本の第一人者。骨太の疫学思考が栄養をどう考えるのか、教養としてお勧めの一冊。

『「誰のため？」「何のため？」から考えよう：GE 流・問題解決の技術「ファンクショナル・アプローチ」のすすめ』横田尚哉

ディスカヴァー携書

物事がなかなかうまくいかない、企画した内容がどうもしっくりこない、そんなときはたった2つの言葉（「誰のため？」「何のため？」）を問いかけるだけで、問題解決の糸口が見えてきます。それが「ファンクショナル・アプローチ」という問題解決の技法です。私も特に社会的活動の場において、ファンクショナルな視点から問題の解決策を考えるようにしています。シンプルかつ有用な思考法なので、ぜひ参考にして下さい。

私が初めてこの本を手にとったのは、まだ日本人選手が海を渡る前の時代でした。1960年代から70年代の日本プロ野球界を舞台に、アメリカ人の目線で「和の精神」や「武士道」、そして「ガイジン」など、ユーモラスな切り口で語った日米比較文化論は、斬新で多くの示唆を与えてくれました。時代は移り変わり、野球の技術や戦術も進化した現代において、この当時から変化したことと、変わらないものを読み解くことは、とても興味深いですよ。



人間科学科

NONAKA KOICHI

野中 浩一

衛生学
胎児期環境学
二者性と大学教育



人間科学科

HARADA NAOYUKI

原田 尚幸

スポーツマネジメント

『止まった刻（とき）検証・大川小事故』河北新報社報道部

岩波書店

2018年度新聞協会賞受賞の連載が書籍となった。筆者のコメントも掲載されている。東日本大震災の津波で全校児童・教職員合わせて84人が死亡・行方不明となった石巻市立大川小学校。その地震発生から避難までの「空白の50分」と、その後の関係者の動きと裁判の検証記録である。学校管理下における戦後最悪の事故はなぜ起きたか…その奥には慢性的な病巣―「横並び主義」と「事なかれ主義」が潜んでおり、これが現場の判断・決定を鈍らせたのではないか。その意味で「空白の50分」は、戦後の教育体制の「縮刷本」だった。多忙化、学力重視、矢継ぎ早の教育改革の中で、「命を守る学校づくり」が後景に追いやられたのではないか。今、「学校」を問う一冊である。

『椿説弓張月』曲亭馬琴

岩波文庫

馬琴といえば『南総里見八犬伝』が有名だが、こちらも負けず劣らず、というよりも、後半冗長になる八犬伝よりも引き締まって読み易い。豊富な典拠に基づき、これでもかとばかりに冒険譚の面白さが七五調のリズムに詰め込まれているのは博覧強記の馬琴なればこそだが、私にとっては登場する動物たちが楽しい。大蛇と戦う狼の子ども（山雄と野風）の忠義。水俣沖ではトビウオとクラゲが嵐を予告し、二匹の龍が襲い、崇徳院の手先の天狗に救われ、巨大な沙魚の腹中に入る。そしてなんとといっても、頭は虎、体は牛の姿をしている禍獣（わざわい）という荒唐無稽な怪獣の見事さ。北斎の挿絵を何度も何度も見入ってしまった。

『現代の教師論』佐久間亜紀、佐伯胖編著

ミネルヴァ書房

「アクティベート教育学」の第2弾が本書である。内容は、①教職の魅力②教職の仕事③専門職としての教職の三部構成であり、それぞれ現役教師や専門家がリアルな現場に寄り添いながら執筆している。日本の教師とその仕事の特殊性（例えば、教員数、勤務形態、社会的地位、多職種との給与の比較等）は、教職を目指す学生にとっては必読だろう。筆者も、第10章において「子どもが〈いのち〉に見える教師」を執筆し、東日本大震災の経験から学んだいのち観と教育・社会観の関係について、作文教育を通して論じている。葛藤しつつ、子どもと歩む、現代の教師のあるべき像が浮かび上がる一冊であり、テキストとしても、読み物としても耐えられる逸作である。

『「自然」という幻想：多自然ガーデニングによる新しい自然保護』エマ・マリス

草思社

何をもって「自然」というのだろう。多くの人は「人の手が入る前のありのままの自然」を想定する。特に「池の水ぜんぶ抜く」で喧伝されて以来、外来生物が除去された自然を「日本本来の自然」とされがちだが、ニホンヤモリも孟宗竹も近世の外来生物だし、縄文時代から考えると、ヒガンバナもモンシロチョウも我々の身近な動植物のほとんどは外来だと考えて良い。そもそも外来生物除去のためには、莫大な人手と予算をかけねばならず、とても「ありのままの自然」なんかじゃなくなる。だからといって、人間が野生生物に配慮せず好きなようにやれば良いというわけでもない。両極端に考えられがちな自然と都市、二元論を避ける知恵がここにある。



人間科学科

SEINO TOSHIHIRO

制野 俊弘

体育科教育学



人間科学科

DAUMAE MASASHI

堂前 雅史

動物行動学
科学技術社会論



総合文化学科

ASAMI KATSUHIKO

浅見 克彦

社会理論
文化研究

『共通感覚論』中村雄二郎

岩波現代文庫

人は、しばしば「個性的な思考」を賞賛する。だが、人文学では個の内から新知見が湧き上がるというのはほぼない。むしろそれは、過去の人々の思考を学ぶことだと言ってもいい。本書は、こうした学問の基本をまざまざと見せつける。中村は、『現代思想』全盛の頃に上梓されたこの著作で、近代以降の視覚の「独走」を批判しつつ、さまざまな感覚的知覚の協働に着目せよ、と訴えた。一見個性的に思えるこの発想は、実はデカルトの「情念論」との格闘の中で生まれた。さらには、マクルーハンの「共感覚」を介して、問題をめぐる思考の連なりは、パークリーやトマス・アクィナスにまで遡る。中村の理説は、数々の思考の遺産からなっていたのだ。

『つじつまを合わせたがる脳』

横澤一彦

岩波書店

近年、認知科学では「多感覚的知覚」に関心が集まり、意識の統合性との関係で議論が盛り上がっている。本書は、そうした学問的関心を平易に紹介する入門書とも言えよう。同じく横澤が監修した『オブジェクト認知』にも目を向けるなら、知覚全般が「多感覚的知覚」を軸にとらえ直されつつあることがわかる。実はこれ、「共通感覚」論の遺産が大いに関係してくる問題なのだけれど、日本の哲学・思想がこの点に着目していないのは残念だ。何を隠そう、関心の焦点は、意識の根本条件にあるのだから。いま現在の問いをしかるべく掘り下げるためにも、偉大な思考の遺産につねに立ち返ることは、必須の作業なのである。



総合文化学科

KATO MIYUKI

加藤 三由紀

中国文学

『トラが語る中国史：エコロジカル・ヒストリーの可能性』上田信

山川出版社

「私はトラである。もうこの世にはいない。」中国に生きたトラの立場からヒトの歴史を描くファンタジーです。「私」は、野生ではおそらく絶滅しているアモイトラ、昔の猛虎が今は亡虎となり、新石器時代から 21 世紀まで、ヒトが残した文字やモノ、花粉分析も駆使してエコロジカル・ヒストリーを綴っていきます。今から 3000 年近く昔の詩から当時の樹林や沼沢の風景を再現するなど、その手法はまさに学問研究の醍醐味満載、学生の皆さんにとって難しいところは、卒業する頃にはわかるだろうから飛ばし読みでも面白い。中国の風水や宗族といった文化背景も解説してくれます。20 年ほど前の出版ですが、図書館ならばすぐ手にとることができます。

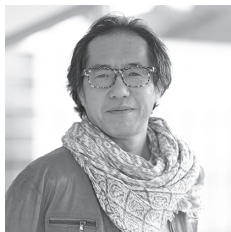
『茨木のり子の家』

詩：茨木のり子、写真：小畑雄嗣

平凡社

詩人茨木のり子が暮らした家の時空を、まるごと本の中にたたみこんだ写真集です。本を開ければ玄関で、ドアのレバーハンドルと小窓の飾りのリズムにワクワクしながら靴を脱ぎ、漆喰の白い壁の質感を味わいながら階段を昇ると、居間でした。「倚りかからず」の詩にうたわれた椅子が置いてあります。窓辺の金木犀、書斎の書棚、家計簿、日記、寝室のクロス、自筆原稿をまとめたクリップ、どの写真にも温もりが宿り、「わたしが一番きれいだったとき」「一本の茎の上に」など、茨木のり子の詩と共鳴しています。

私はこの本と和光大学の社会人受講生とのご縁で出会うことができました。本を手にとるたび、人とのつながりを感じます。



総合文化学科

UENO TOSHIYA

上野 俊哉

社会思想史
文化研究

『コスモスとアンチコスモス：東洋哲学のために』井筒俊彦

岩波文庫

神話と哲学、言語と宗教について透徹した思考で東西文化を比較した知的巨人の晩年の作。この世界はつねに一定の秩序として構造化されて、一つのコスモス（宇宙）として維持される。しかし、そのはじまりにはカオス（混沌）や無がある（だからこそ、世界は自由でもある）。このカオスからコスモスへの移行は一回こっきりで終わらない。今ここでもカオスとコスモスは目にもとまらない速さで交錯しあっている。世界は特定のかたちをなさない存在のエネルギー、意味をもつ以前に意味へと向かう脈動につらぬかれている。これを井筒は「アンチコスモス」としてとらえた。イスラム哲学、仏教の華嚴、各地の神話・・・などをとりあげながら、意識の深層にひそむ不思議な意味の貯蔵庫（アラヤ識）にせまっていく。実にこの本、宇月原晴明の伝奇ファンタジーやガンダム（鉄血のオルフェンズ）にも影響を与えている。

『写真と年表による和光大学 30 年外史』
和光大学 30 周年記念事業委員会

元人間関係学部教授の鈴木勤介先生が編集なさった和光大学の「外史」である。六〇年代後半の学費闘争など当時の状況もうかがえる貴重な資料である。キャンパス内にテント村を作って泊まり込み、ヨガのポーズで座る学生など、写真からは同時代の対抗文化の息吹が伝わる。ただこの「外史」、なぜか封印の憂き目にあっており、今日、なかなか手にとれない。学生運動に否定的な ----- しかし世の中的には「リベラル」な ----- 教職員の強い反対によるものという。気に入らない文化や表現を検閲しようとするのは保守派ばかりではない。今の若い学生さんや教職員には、この対立そのものがよくわからないかもしれない。だからこそ、この知られざる「外史」は梅根記念図書・情報館にこそ、ひっそり置かれてあっていい。



総合文化学科

KOSEKI KAZUHIRO

小関 和弘

日本近現代文学（詩）
日本文化論（映像）

『戦後名詩選Ⅱ』野村喜和夫〔ほか〕編

思潮社 現代詩文庫特集版 2

谷川俊太郎、茨木のり子、白石かずこ、といったそうそうたるメンバーから「たましいの詩人」荒川洋治、井坂洋子、平出隆、松浦寿輝、伊藤比呂美まで計 30 人の戦後詩人の秀作を 3～5 編ずつ選んだ解説付きのアンソロジーです。このうち、荒川は 2019 年の日本芸術院賞・恩賜賞を受賞されたエライ方ですが、かつて寺山修司（彼の詩も本書に収録）も参加したシンポジウムで自分を（ジョークで）「たましいの詩人」と呼びました。それに対して寺山が「荒川くん、魂つてのはカップラーメンや餡パンで出来てるんだぜ」と言ったのが、いかにも二人らしいやり取りでした。詩人ってやっぱりオモシロイ、詩はもっとオソロシイ。勿論『戦後名詩選Ⅰ』もありますよ。

『中井久夫の臨床作法』

統合失調症のひろば編集部編

日本評論社

ギリシャの近代詩人カヴァフィスの訳者でもある精神科医・中井久夫先生に薫陶を受けた精神科医の方々が、その臨床技法や人への接し方の特質、美質を綴ったエッセイと、中井先生を囲む座談会を取める雑誌「こころの科学」の特別号。人をモノのように扱わない、業績のためにする論文は書かないなど、他の専門領域の人間も学ぶべき中井先生のスタンスが照らし出される。論文 3 編の再録があるが、「治療の滑り出しと治療的合意」がお奨め。先生の著書『徴候・記憶・外傷』の論文は、言葉や記憶、詩について考える上でも刺激的。なお、精神医学の世界をちょっと違う角度から見たいならば、アレン・フランセス『〈正常〉を救え』（講談社）は必読。

『麦ふみクーツェ』 いしいしんじ

新潮文庫

ひとりの少年の成長の旅路を通して音楽の根源にせまる長篇小説。小さな港町でブラスバンドを率いるおじいちゃんに「楽器としてのねこの声を極めよ」との教育をほどこされた少年ねこは、大都会へ指揮者修行に出る。弟子入りしたのは幼い頃の体のまま十代で失明し娼婦に囲まれてくらす天才チェリスト。へんてこを自認する彼は、それをかえって強みにしている。そういえば、父親は素数にとりつかれた数学者、話し相手は雷に打たれたせいで動きのぎこちない元船員など、ねこの身近にいる人たちはみなどこかへんてこだ。ところでクーツェとは？ 麦ふみって何？ ねこにはそれが見えるらしいよ。「へんてこだね」で終わらせずに、ねこの話を聞いてみて。

『熱海温泉誌：市制施行八〇周年記念』 熱海温泉誌作成実行委員会編

熱海市

熱海温泉についての「読んで 見て 楽しむ百科事典」。ゆるやかに区分された時代ごとに歴史、文学、美術、建築、経済、温泉医学など多様なテーマで構成されている。A4 版、全編カラー印刷で美しいビジュアル資料が豊富なのも魅力である。市町村誌（史）といえばかつては紺の布張りに金の題字が定番だった。が、本書の表紙は鮮やかな赤を背景に、温泉の煙がわき上がり、早咲きの梅や桜があしらわれている。市民による勉強会を出発点に生まれたという新しいタイプの市誌（史）にかける情熱が、ふつふつと伝わってくるようだ。「温泉好き」だけでなく、地域文化、社会史、観光研究、市民運動に関心のある人はぜひ手にとってみてほしい。

『アメリカ映画の文化史：映画がつくったアメリカ〈上〉〈下〉』 ロバート・スクラー

講談社学術文庫

アメリカ映画の最初の約 100 年の歴史を、アメリカの社会的、文化的文脈に位置付けた本です。個々の作品や作家についても述べられていますが、産業としての映画、映画の観客や政府の検閲、アメリカ内外における映画の文化的影響などが詳細に論じられています。映画は一貫して文化伝達網の不可欠の構成要素で、その内容と影響とのありようが全体としてのアメリカ文化の特徴と方向を定めるうえで力となっており、「アメリカ文化とは、映画文化かもしれない」と筆者は述べています。20 世紀に最も影響力のあるメディアの一つであったアメリカ映画の文化的価値について学びたい人にお勧めします。

太平洋戦争の激戦地の一つであった硫黄島は、これまで幾度か映画の題材になってきたことや、米兵が星条旗を掲げる報道写真でもよく知られていると思います。しかし、本書を読むと、知らないことがたくさんあることに気づかされるでしょう。（映画、あるいは英語圏では「いおうじま」と呼ばれることが多いのですが、正式には「いおうとう」であることをはじめとして。）忘れられた硫黄島の近現代史が、島民の証言を交えながら記されており、今もなお住民が帰還できないという実態などがよくわかります。東京都の一部である硫黄島についての本書を、東京の一部である町田で学んでいる学生の皆さんに特にお勧めします。



総合文化学科

NAGAO YOKO

長尾 洋子

文化地理学



総合文化学科

NAKAYAMA RISA

名嘉山 リサ

映画研究

『乙嫁語り』 森薫

エンターブレイン

中央アジアというと、内乱とテロリズムが続く物騒な地域と勝手に思われることが多い。そのような誤解は正されつつあるが、やはりまだ、かの地は日本からは遠い。だが、本書はこの地域をぐっと近づけてくれる。いずれのコマからも、中央アジアの伝統的な暮らしと景色が緻密で美しい描画によって感覚的に伝わる。つまり、「読む」のではなく「見る」本でもある。ユルタ（天幕）やメロン、ナン、馬、民族衣装…。18 世紀から 19 世紀初頭にかけての家族や結婚、部族や社会のあり方が描かれる。かつて叙事詩の語りは口誦でなされたが、『乙嫁語り』は現代の新しい語りの姿かもしれない。中央アジアの伝統的文化に関心をもつ人への格好の入門書である。

『九月、東京の路上で：1923 年関東大震災ジェノサイドの残響』 加藤直樹

ころから

関東大震災直後の流言飛語により朝鮮人などがおそらく数千人規模で虐殺された事件の証言を集めた本。情報の出典がきちんと注記されていて信頼できる本である。震災時に流布した「朝鮮人暴動」のデマに踊らされた人々が手当たり次第に朝鮮人らしき者たちを虐殺したとの歴史が叙述されている。本書が描く関東大震災直前の状況と今の日本は酷似していると思う。当時、朝鮮半島には日本の植民地支配への抵抗運動が生まれており、それへの恐怖から日本では「朝鮮人は人にあらず」言説を政治家やマスコミが垂れ流していたという。現代の嫌韓ヘイト言説が蔓延する「美しい国、日本」と真逆の状況とそっくりなのである。今読むべき本だ。

『シャーマニズム』 シャルル・ステパノフ、ティエリー・ザルコンヌ

創元社

中央アジアの文化を知るためにシャーマニズムの理解は不可欠である。シャーマニズムやシャマンという言葉は、現在いろいろな意味で多用されるが、これらの言葉は本来、この地域の精神世界や信仰のあり方を示すためのものであったからである。占いや予言、治療や託宣を行うシャーマンは、精霊の助力を得て、この世界と異世界とを結びつけた。本書は、あまり知られることのない、中央アジア・北アジアのシャーマニズムについて、先行研究やシャーマンの語りのテキスト、多くのカラー図版を交えて説いている。シャーマニズムは朝鮮半島や日本などにも深い影響を与えたと考えられ、その理解はこれら地域の文化について考える上でも示唆的であろう。

『漢文と東アジア：訓読の文化圏』 金文京

岩波新書

漢文は前近代の東アジアの共通言語だった。たとえば江戸時代、日本へは朝鮮国王の通信使が派遣され幕府との国交が行われていたが、通信使と日本側の役人たちはしばしば漢詩を詠みあって交流した。口頭言語では通訳が必要だが漢文なら直接筆談ができたのである。また、和光大学のフリマ広場の名でもある「ホーチミン」はベトナム独立の父だが、彼は独立運動中に拘禁された獄中で漢詩を書き残している（以上、本書による）。元号「令和」の典拠となった『万葉集』の漢文も同様の国際語としての漢文である。この本を読むと、前近代社会の方が漢文を媒介としたまともな国際関係があったのではないかとすら思えてくる。今読むべき本だ。

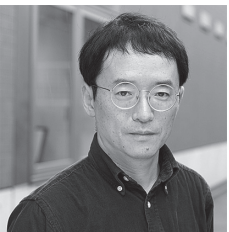


総合文化学科

SAKAI HIROKI

坂井 弘紀

中央アジア文化史
テュルク英雄叙事詩研究



総合文化学科

TSUDA HIROYUKI

津田 博幸

日本古代文学

『江戸の遺伝子：いまこそ見直されるべき日本人の知恵』徳川恒孝
PHP 文庫

徳川家第十八代当主が語った「なぜ平和な時代が250年間も続いたのか？」という江戸の真の姿を歴史書というよりも読み物的にまとめ上げたもの。鎖国と諸外国の動き、幕府の政策、経済活動や庶民の暮らしなどを雑学的な興味で読み進められる。政治経済の中心が関西から江戸に移り反映していく様子は、先の東京オリンピック時の高度成長期の東京を思い出させ、奇しくも2020 年は、再びその東京で開催される二度目のオリンピック。初版は今から10 年以上前のものだが、江戸時代の長き時間を考えると、サブタイトルの「いまこそ…」は色褪せることはないように感じる。江戸中期ごろから江戸に暮らす「倉方家」としてもなんだか嬉しい一冊。

『不便益：手間をかけるシステムのデザイン』川上浩司ほか
近代科学社

自身の専門分野であるプロダクトデザインは、産業革命以降「便利」なものを大量に世に送り出すことで、人々の生活を手助けして来た歴史がある。しかし、その結果、地球資源の枯渇への危機感や温暖化での環境破壊など、次世代に負の遺産を残したり、手仕事による伝統や文化も犠牲としている背景がある。そこで編著者の川上氏は、「不便でなければいけないこともある。」と提唱し、仮想の研究所を立ち上げ「不便の効用」という視点で既存のモノゴトの意味を再考して、新しいモノゴトを作り出す手がかりにしてみようと考えた。本書はそうした考えに賛同した有志の研究をまとめたものである。未来を見つめるためにぜひ読んでいただきたい一冊。



芸術学科

KURAKATA MASAYUKI

倉方 雅行

プロダクトデザイン

『童夢』大友克洋
双葉社

20 代に衝撃を受けた伝説の傑作漫画。凄すぎて怖すぎて読みすぎてもうボロボロに。コマ割り、吹き出し、画力、すべてが新しい。スタンリー・キューブリック映画一本分の感動を与えてくれた。

『広告は私たちに微笑みかける死体』オリビエーロ・トスカーニ
紀伊國屋書店

デザインの仕事で、壁にぶち当たると、いつもこの本を開いて勇気付けられます。グラフィック業界、広告業界を志す若い人必読の書。



芸術学科

KONDO TADASHI

近藤 忠

アドバタイジングデザイン

『人及び動物の表情について』チャールズ・ダーウィン
岩波文庫

ダーウィンといえばまず『種の起源』が取り上げられ、その次に『ピーグル号航海記』、そして『人間の由来』が来る。ところが1931 年に『人及び動物の表情について』というもう一冊のダーウィンの著作が翻訳されている。しかし長い間絶版であったし、復刻されても戦前の版そのまま、とても読みにくい。他の日本語版はない。だから本書はダーウィンについて語る時にもほとんど無視されている。ところが中を見れば、鳥やイヌやネコやクロザルやチンパンジーの姿勢や表情についてのイラストや人間の表情の写真が豊富に掲載されていて、多くの感情の分析が行われている。後に脚光を浴びる動物行動学や社会生物学もみな出発点はこの本だった。

『逃亡派』オルガ・トカルチュク
白水社

2008 年、ポーランドで最も権威ある文学賞《ニケ賞》を受賞した小説。複数の登場人物の116 の〈旅〉のエピソードがタペストリーのように編み上げられている。「逃亡派」は、ロシア正教のあるセクト (Bieguni) の名で、放浪を唯一の正しい生き方と信じる。その精神に共鳴した作者が表題に採用、文中にも「逃亡派」が登場する。描かれるのは物理的な旅にはとどまらず、むしろ移動から呼び起こされる、想念のたえまない移り変わりに力点が置かれる。東ヨーロッパの作家達は強権的なナチス支配、社会主義体制を経験していることから、もっぱら自らへの語りかけへ向かう特徴がある。内面の深みに潜ってゆく知性は、私達にとっても、諸々の社会的圧力から逃亡し続ける力になるのではないか。

『はじめてのギリシア神話』松村一男
ちくまプリマー新書

神話の中でも一番人気なのがギリシア神話である。さまざまな男女の神、英雄、美女、怪物が登場するし、舞台もギリシア本土から世界の果て、さらには冥界まで広がっている。そうしたギリシア神話の魅力を伝えたいと思って本書を書いたのだが、いかんせん類書が多すぎる。そこで違いを出すためにギリシア神話と他の地域の神話との類似に焦点を当てて、なぜ類似しているのかを説明することに意を注いだ。それは人間心理の共通性に発する場合もあるし、文化の伝播の結果の時もある。つまりギリシア神話を素材として、人間の心の共通性や文化の移動の歴史といった問題にも関心を持ってもらおうとしたのだ。

『コミュニティ・アーカイブをつくろう！：せんだいメディアテーク「3 がつ 11 にちをわすれないためにセンター」奮闘記』佐藤知久ほか
晶文社

「3 がつ 11 にちをわすれないためにセンター」では、市民、専門家を交え、復旧・復興の過程を、映像、写真、音声、テキストを使って発信している。映像制作経験のない人々が自らカメラを持ち、地域の記憶を撮影してゆく。一見つたないようにみえる映像が、想像の余白や独自のリアリティを生み出す。草の根アーカイブにはそんな魅力がある。いわゆる「表現者」はテーマを研ぎ澄ませ、暗喩的な「しかけ／ずらし」により作品を概念化させようと試みる。制作の過程でそぎ落した余白が、本当は他者につながる豊かな回路だったのかもしれない、そんな可能性を感じられる試みだ。映像や写真を学びたい人、地域固有の歴史や物語に興味のある人におすすめ。



総合文化学科

MATSUMURA KAZUO

松村 一男

神話学



芸術学科

OTSUBO AKIRA

大坪 晶

現代写真・映像

『パステルカラーの罠：ジェンダーのデザイン史』ペニー・スパーク

法政大学出版局

なぜデザイン史に女は存在しないのか。どうしてデザイン系学校の教員に女は少ないのか。同著は、デザインの歴史や文化から女が排除された仕組みを解く。デザイン史といえば、ペヴスナー著『モダンデザインの展開』（1936）が有名であるが、その歴史に女はほぼ存在しない。この女不在の歴史への批判として出版されたのが『パステルカラーの罠—ジェンダーのデザイン史』である。著者によれば、純粋な機能美を目指したデザインの運動は、装飾を悪趣味なものとし、美の領域から排除した。また、装飾を好む女は“精神的に弱く”“受動的”であり、「教育」の対象とみなされた。その「教育」は「グッド・デザイン」展等、展覧会を通じて行われたのである。

『理性の暴力：日本社会の病理学』古賀徹

青灯社

なぜハラスメントは起こってしまうのか。どうしていじめはなくなるらないのか。また、それらの問題が起こった際、なぜ組織は問題を隠蔽し、さらには被害者自身に責めを負わせるのか。被害経験のある者であれば、誰しもこうした疑問を持つだろう。これらの問題を著者は、第1章「いじめの論理学」で倫理学の立場から論じる。著者によれば、いじめは自由を標榜する教育機関にこそ現れる「病理形態」である。とすれば“自由”を強調する本学にとってこの問題は他人事ではないだろう。誰しもが被害者、あるいは加害者となりうる。著者によれば、いじめやハラスメントは、“精神的に弱く”“受動的”とみなされた者への「訓育」として行われるのである。

『破滅者：グレン・グールドを見つめて』トーマス・ベルンハルト

音楽之友社

ピアニストのグレン・グールドを題材にした小説です。彼は20世紀を代表するピアニストで、あまりに遅いテンポのモーツァルトのトルコ行進曲や、あまりに速すぎるテンポのベートーヴェンの月光の最終楽章など、ユニークな演奏で知られています。しかしこれは、グールドの伝記ではなく、彼が50歳で亡くなった翌年に出版されたフィクションで、全編を通して同じような内容が、形を変え、品を変え変奏曲のように書かれています。破滅的な内容が続きますが、どこか心地良さを感じさせるところが不思議です。

『ART SINCE 1900：図鑑 1900年以後の芸術』ハル・フォスターほか

東京書籍

1900年以降の美術の動向を、1年単位で2015年までをわかりやすく追いかけています。例えば、「1920 ダダ見本市がベルリンで開かれる。～～」などで、1年につき、ほぼ1つ（全体で約130個あります）のリード文を見ただけで、時代の流れがわかるようになっています。図版も884点と多く、資料的価値も高い。クリムトの時代と自身の知っている現代も、同じ強さで書かれていることで、時間を等価に扱っているところが平等主義に思え、客観的な魅力を感じます。アートを志す人以外でも、手元に置いておきたい1冊でしょう。

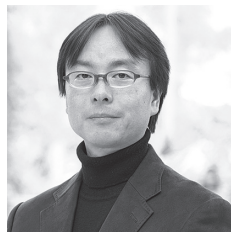


芸術学科

SERI YUKIYO

世利 幸代

デザイン美学
グラフィックデザイン



芸術学科

TAKUMA AKIHITO

詫摩 昭人

美術
絵画

『自然なきエコロジー：来たるべき環境哲学に向けて』

ティモシー・モートン

以文社

こちらもお薦めする訳ではありません。しばらく忙しくて中断していたけれど、やっと読むことを再開した今読んでいるもの。「カバンの中にどんな本が入っているの？」と、本好きなイケてる人にとときどき尋ねてみる。その内容や良し悪しについて知りたい訳ではない。彼らが今何に反応しているのか知りたい。著者、テーマ、キーワード、ジャンル、、、切り口は様々だが感度の良い人のカバンには時代の匂いを放つ本が入っている。2007年出版の少し古い書籍だが、Timothy Morton、Ecology、O-O-O、Ambient、場所、自然、というワードで今の私が反応したのが本書。読み終わってどんな印象を持つのか、それは分からない。

『幽霊たち』ポール・オースター

新潮文庫

私が絵を描いたり何か表現をするときの根底には「何も言わないことを言うために」という解決できない矛盾があります。こういう考えに至った影響の一つがポール・オースターの作品です。「まずはじめにブルーがいる。次にホワイトがいて、それからブラックがいて、そもそものはじまりの前にはブラウンがいる。」本書のはじまりは何かを予感させておきながら、それを裏切る不思議さがあります。何も起きていないけれど起きている。では一体何が？ 気がつけば自分の内面を深く見つめることになってしまう。

矛盾を矛盾のまま物語にのせて、読者を可能性の海へ連れ出します。

『神話なき世界の芸術家：バーネット・ニューマンの探究』多木浩二

岩波書店

バーネット・ニューマンは、絵画を思考し構築するために私が深く影響を受けた作家のひとり。抽象表現主義を代表する人物だけれども、ニューマン自身の絵画哲学から必要な事の多くを学んだ。言語的に考え、言葉を乗り越えた先にある視覚表現の可能性を探究した作家といえます。90年代後半、私は大好きな多木浩二の本著をどうしても読みたかった。しかし、お金は無く新品などは到底買えず、全国の古本屋からやっと1冊を探し当て、丁寧に味わうように読み返し興奮した事を覚えています。本書を読む事をすすめる訳ではありません。ただ、年月が過ぎても変わらない特別な1冊が私にもあるということ。

『20世紀美術』高階秀爾

ちくま学芸文庫

キュビズムを追求するピカソとジョルジュ・ブラックがコラージュを発明するに至ったオブジェとイメージのわくわくするような関係。ウィリアム・デ・クーニングのデッサンをロバート・ラウシェンバーグが消しゴムで真っ白に消してしまった作品《消されたクーニング》の逸話。美術へのなぜ？ に対する明快で腑に落ちる語り口が、美術の面白さと奥深さを教えてくれます。受験生の頃に読んで、美術館で興味を持った作品たちと、受験のために自分が勉強して描いた石膏デッサンとの、遠い遠い、けれども続いている道を示してくれた本です。



芸術学科

SATO ISAO

佐藤 勲

芸術



芸術学科

SATO KATSUHISA

佐藤 克久

絵画



芸術学科

NONOMURA FUMIHIRO

野々村 文宏

メディア論
美術批評

『霧の抵抗：中谷芙二子展』
山峰潤也【ほか】編

フィルムアート社

去年の水戸芸術館での回顧展には震えたね。この人は霧で「彫刻」を作っちゃうんだ。しかも、大阪万博の頃からかれこれ 50 年あまり、不定形の／霧消してしまう「彫刻」を作り続けている。中谷芙二子さんの霧の彫刻を観ていると、固定観念で凝り固まった脳味噌が心地良くマッサージされてほぐれてくる。ラディカル（過激）な、とは彼女のような姿勢を指して使う言葉だ。もうひとつ、きみたちぐらいの頃、私はデストロイなパンク小僧で、ニューヨーク・ダウンタウンの音楽シーンの映像が観たくて、原宿のビデオギャラリー SCAN に通ったものだが、今は無いあの伝説の場所も中谷さんが作ったものだった。だから、自分にとって中谷さんこそ真のパンクなのだ。

『ゾンビの帝国：アナトミー・オブ・ザ・デッド』西山智則

小鳥遊書房

ゾンビ映画の増殖が止まらない。個人的には、ジャームッシュ監督「THE DEAD DON’ T DIE」＝3D が早く観たい。それはともかく、この本は大学の英文学の先生が書いたゾンビ映画探求本である。ただし、ここでの「ゾンビ」の範囲は広く、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の描く日本の妖怪からグリフィス『国民の創生』での侵入する他者からラヴクラフトのクトゥルフ神話まで入ってくる。その理由は、もともと別々に書かれた紀要論文などを再編集したからなのだが。ただし、だからこそ英米文学の隠れ入門書としても読めるところがミソで、この本を読んで、エンタテインメントとしてのホラー映画から英米文学の逸路に迷い込んだら、きみも立派な徘徊するゾンビだ！



芸術学科

HANDA SHIGEO

半田 滋男

現代美術
美術館学

『「定常経済」は可能だ！』
ハーマン・デイリー

岩波ブックレット

うっかり芸術なんてものに係わることになって表現の意味を日夜考えていると、様々な疑問がとりとめなく拡散するばかりで収束することがない。みんなにも経験があるかも知れない。自分が一体何のために何をしようとしているんだか、ある日その意味がまったく分からなくなる。どんどん分からなくなってくる。表現という営為を生命体（含人間）が行わざるをえないのは一体なぜだろう。表現活動とは生命体の定義でもある代謝の一種ではないか。解がない疑問から逃避せずに懊悩と模索を続けようとする者にのみボンヤリとした道がひらけてくる。本当のことを言っちゃうと、懊悩を経っていない「作品♡」なんて薄っぺらなだけだ。
私が地球の生命体の営為としての表現について考える上で少し役に立った

『スモール・イズ・ビューティフル：人間中心の経済学』E・F・シューマッハー

講談社学術文庫

書物を紹介します。まず『持続可能な発展の経済学』（ハーマン・E・デイリー）はとても興味深い書物だが、私にもなかなか手強かった。みなさんには同じ著者がインタビュー形式でやさしく説明してくれる小冊子『「定常経済」は可能だ！』がいい。あと E・F・シューマッハー『スモール・イズ・ビューティフル』。第一部、なかでも「仏教経済学」だけでも読んでみるといい。どちらも芸術のことなんか少しも書いてないが、根底は表現（＝生きること）の意味と通底してる（こんな永久機関みたいな理屈で感心してるなんて、経済経営の諸先生方には鼻で笑われるかもしれないが）。これらはチョット難しそうだという人には辻信一『スロー・イズ・ビューティフル』（平凡社）。少しは悩み給え。



芸術学科

HATANAKA TOMOKO

畑中 朋子

情報メディア・デザイン

『政岡憲三とその時代：「日本アニメーションの父」の戦前と戦後』
萩原由加里

青弓社

政岡憲三は 1898 年生まれのアニメーション監督である。セル画やトーキー（セリフや音楽の同期）を日本のアニメ産業に導入した先駆者で、政岡映画美術研究所（私財を投じた最先端スタジオ）や日本動画（東映アニメーションの前身）を創設し、アニメ黄金時代を担う人材の育成に寄与した。
本書は立命館大学の史学から表象領域へ進んだ著者の博士論文が元になっており、新聞雑誌、後継者の著作、社内講義録や教材等の大量の資料から政岡の足跡が緻密に検証されている。戦前の京阪神地域の文化的環境のクリエイティブシティ的な分析や、戦中に敵国のディズニー映画がプロパガンダ映画製作の参考用に密かに上映され、関係者を圧倒した逸話も興味深い。

『アライバル』ショーン・タン

河出書房新社

オーストラリアの絵本作家・イラストレーターが移民をテーマに描いたグラフィック・ノベル（文字のない絵本）である。様々な移民への聞き取り調査や写真資料に基づくドキュメンタリーの側面を持ちながら、セピア調の美しい絵で描かれた不思議な生物や世界観にあふれるファンタジーとして話題になり、青少年文学の最高賞アストリッド・リンドグリーン記念文学賞を受賞。
中国とアイルランドにルーツを持つ自分自身や友人・家族の姿をモデルに、架空の国の脅威から逃れて見知らぬ国の新たな市民となっていく男の体験を描いている。その創作過程や発想の源泉を紹介した図録『ショーン・タンの世界：どこでもないどこかへ』も併せて手に取って欲しい。



芸術学科

MATSUEDA ITARU

松枝 到

文化史
想像力論

『地下鉄のザジ』レーモン・クノー

中公文庫

パリのおじさんの元にやってきた田舎少女ザジの口癖は「ケツくせえ！」。パリ訪問の最大の目的はメトロ（地下鉄）に乗ることだったのに、あいにくのストライキ。だからザジは鬱憤ばらしに大暴れ、大人たちをとんでもない大騒動に巻き込んでゆく。この生意気な少女の言葉づかいは、伝統的な小説形式をぶちこわす革命的な起爆剤でもあった。反小説作家クノーの最高傑作。ルイ・マル監督の映画版も必見。またクノーは、パリの街角のありふれた風景を 100 個の文体でかき分けて見せるという離れ業を、あの恐るべき書『文体練習』（朝日出版社）で繰り広げているが、ザジはこの文体実験の実践編としてみることができ、ますますおもしろくなってくる。

『わが住む村』山川菊栄

岩波文庫

1936 年（昭和 11 年）、夫の入獄を機に神奈川県鎌倉郡村岡村（現在は藤沢市内）に移り住んだ菊栄は、昔ながらの風俗や自然とのつきあい方を残す村の生活に目をみはる。世界大戦にむかって走り出す都会の喧噪をよそに、たんたんと日常をつむいでゆく村人の生きるさまをみつめ、菊栄は、やがて近代化に飲みこまれてゆくことになる伝統的な日本の村の姿をいきいきと記録する。日本の女性解放運動の原点ともいうべき貴重な書。山川菊栄は社会運動家・山川均の妻で、柳田國男の教えのもと、『武家の女性』など多くの著作を残した。『山川菊栄評論集』（岩波文庫）がいい手引きになる。この本を手にして藤沢散策をしよう。

『ジキル博士とハイド氏』
スティーヴンスン

光文社古典新訳文庫

「ジキルとハイド」という名は、映画やドラマで聞いたことがある人は多いと思います。ジキル博士が薬を飲むことで裏の顔であるハイドという凶暴な性格に変貌する、二重人格を題材にした物語です。しかし、この作品には、犯人探しや謎解きの面白さだけでなく、産業革命後の科学技術の発展やダーウィンの『種の起源』に影響を受けて英国国民の心の闇が、映し出されています。作品が発表されたヴィクトリア時代後期は、伝統的なキリスト教信仰への疑いが高まった時代でもありました。ハイドが小柄で醜いのは、進化前の人間像として描かれているからです。是非、この本を手にとって、作者の心の闇への深い関心を感じてみてください。

『財政学』池宮城秀正編著

ミネルヴァ書房

政府の経済活動について考えるのが財政学という学問です。本書ではまず、財政学の理論を学び、予算や租税、公債、政策などの仕組みが理解できるような構成になっています。長期にわたる経済の低迷や、少子高齢化に伴う人口減少など、日本は様々な問題を抱えています。こうした問題に対処しつつ、国民福祉の維持・向上を図る方法を考えることが財政学を学ぶ者に求められる役割でもあります。本書は、財政学に関する基礎的知識が一冊で学べるようにコンパクトにまとまっていますので、大変読みやすく、入門書としては最適内容となっています。是非、この本を手にとって、財政の知識を身に付け、この国のあり方について論じてみてください。



経済学科

INADA KEISUKE

稲田 圭祐

公共政策
公会計

『Factfulness：10の思い込みを乗り越え、データを基に世界を正しく見る習慣』ハンス・ロスリングほか

日経 BP 社

著者は異色の元教授だ。得意技は剣飲み。本の冒頭を紹介しよう。「私の国際開発の授業では、たまに講義の締めくくりに剣飲みの芸をすることがある。わたしは演台によじ登り、地味なシャツを脱ぎ捨てる。下に着ているのは、金のスパンコールで稲妻をかたどった、黒のベスト。教室が静けさに包まれると、スネアドラムの音が鳴り響く。それに合わせて、銃剣をゆっくりと飲み込む。腕を広げる頃には、教室は大騒ぎだ」いかがです。こんな教授の本ならば、読んでみたくなりませんか。彼が剣飲みで伝えたかったのは、常識に捕らわれない発想が大切だということ。本書は世の中の一見非常識に思えるものに真実が隠されていることを教えてください。



経済学科

KATO IWAO

加藤 巖

開発経済学
国際経済学

『太陽の塔 岡本太郎と7人の男（サムライ）たち：48年目の誕生秘話』

平野暁臣

青春出版社

戦後の日本国民の意識を大きく変えた巨大国家プロジェクト「日本万国博覧会（大阪万博）」のシンボリック存在“太陽の塔”は博覧会全体を象徴するパビリオン「テーマ館」である。テーマ館総合プロデューサーに起用された芸術家・岡本太郎氏はどのような意図で太陽の塔を建設し、万博に立ち向かったのか？「世界へ新しい日本を見せたい！」というクリエイティブな野心を持ち、人生を賭けて挑んだ岡本を支える7人のサムライたちが太陽の塔の誕生秘話を語る。「太陽の塔は終戦と同じくらい文化の大きな区切りだと思っている。日本はそれからつまらなくなった。でもまたあの頃のようなダイナミズムを取り戻せるって思う。」と語るサムライは？

『鶏衣』横井也有

岩波文庫

横井也有の俳文集です。横井也有は元禄15年（1702、忠臣蔵の年）の生まれ、天明3年（1783）没で、武士、国学者、俳人として知られています。『鶏衣』（うずらごろも）とは継ぎはぎだらけの着物のこと、鶏の羽がまだらのように見えたからだそうです。継ぎはぎの書物ですのでどこから読んでも構いません。内容はいたって軽妙。俳句を読み解きながら、当時の四季や風情、人情話、人生批評など幅広い内容です。原文は古文ですが、詳しい注釈が出ていますので十分楽しめます。一行一行読み進めて一節が終わる頃にはその面白さ、裏に隠された也有の深い洞察、観察眼が見えてきます。江戸時代の風雅の世界を味わってはいかがですか。

『世界を変えるSTEAM人材：シリコンバレー「デザイン思考」の核心』

ヤング吉原麻里子、木島里江

朝日新書

近年、世界各国で「STEM教育」が導入されてきた。Science（科学）、Technology（技術）、Engineering（工学）、Mathematics（数学）の頭文字を取った言葉で、これらの学問を積極的に取り入れ、IT社会とグローバル社会に適応した人材を創出する教育である。今はこれに「A」が新たに加わり『STEAM教育』へと移行しはじめた。「A」とはアート（芸術）である。論理的な思考に加え、直感的な思考も重要であると考えます。論理的に完成系を作り出すよりも直感的に手掛け、失敗し更に上の完成系へと作り上げる。これは人間でしかできないプロセスとなる。「人間」とは何か？を考えさせられる。



経済学科

ITO TAKAHARU

伊藤 隆治

科学
アート
デザイン
人材育成

『道徳感情論』アダム・スミス

岩波文庫

経済学の父・アダム・スミスの『国富論』と並ぶ二大著作のひとつです。『国富論』は、常に世界経済が困難に直面する度に紐解かれますが、その人間的部分を支えるのが『道徳感情論』と言えます。経済学の基礎としての人間研究であるばかりでなく、人間本性論、人間関係論でもあり、人々とのつながりからみる社会のあり方を問うていて、現代にも通じる問題意識を提示しています。人間関係が希薄になりがちな時代ですが、幸福論や恋愛論などからの解説本もあり、「人間とは何か」から始まる人間社会研究の古典としての役割も果たしています。講談社学術文庫、日経BPクラシックスなど多くの訳本があり、EconlibのHPから原文無料で読めます。



経済学科

ITO TATSUO

伊東 達夫

経済学史

『ドイツ人はなぜ、1年に150日休んでも仕事が回るのか』熊谷徹

青春出版社

日本では被雇用者の働きすぎが問題となっています。サービス残業が当たり前に行われ、有給休暇は半分も消化されません。これは、終身雇用制が事実上崩壊しているにもかかわらず、高度経済成長期に作られた家族的経営を前提とした雇用慣行が続いていることや、市場で労働環境を蔑ろにした競争が横行していることに起因すると思われます。本書は、良好な労働環境のもとで、経済が堅調なドイツを取り上げ、ドイツ人の働き方に対する考え方や、労働環境を改善する様々な工夫を紹介したものです。日本の労働や競争に対する意識を変革する示唆に富んでいます。これから社会にでる皆さんに是非読んで頂きたい本です。

『大人のための社会科：未来を語るために』井手英策ほか

有斐閣

この本は、経済学、政治学、社会学、歴史学の分野で活躍する40代～50代の研究者が著したものです。社会問題を論じることに背を向ける人々が増えている現状を憂いて、あえて「上から目線」で、様々な社会問題について解説をしています。具体的には、GDP、勤労、時代、多数決、運動、私、公正、信頼、ニーズ、歴史認識、公、希望、という12のキーワードを示し、それぞれについて、専門的な見地と社会全体を捉える視点の両方から見解を示しています。考えさせられる本です。これからの日本社会を支える皆さんに是非読んで頂きたいと思います。



経済学科

HANYA TOSHIHIKO

半谷 俊彦

財政学



経済学科

HIGUCHI HIROO

樋口 弘夫

社会政策

『失われてゆく、我々の内なる細菌』マーティン・J・フレーザー

みすず書房

著者は、我々は何者かと問い、ヒトの体は30兆個の細胞からなるが、そこは100兆個もの細菌の住処である、と答える。え～私たちはバイキンの中に埋もれて生きているの？と読者は、冒頭から本書に引き込まれてしまう。さらに「ピロリ菌の根絶は、利益よりも、より大きな健康被害を人類にもたらず…」ピロリ菌が胃酸をコントロールして胃食道逆流症を抑制する仕組みに注目、その除去により、むしろ食道ガンが発症する可能性を指摘する。ヒトは多くの常在菌と共生して今日まで生き残ってきた、という筆者の主張は、大きな示唆に富んでいる。

原著者も雄弁だが、翻訳も実に練れており、専門知識なしに十分に楽しめる出来映えとなっている。

『塗りつぶされた町：ヴィクトリア期英国のスラムに生きる』サラ・ワイズ

紀伊國屋書店

本著は19世紀ロンドン最貧地区のスラムの実態を詳らかにした力作である。そこを往来した人びとの中に、1880年代ロンドンで貧困調査を実施したチャールズ・ブースがいた。彼は自らの資産を投じ、ロンドンの1万数千の路地で家庭の様子を調査、住民の30パーセントが貧困線以下で暮らしているという衝撃的な事実を発見した。さらに調査結果を階層ごとに色分けした「貧困地図」を作成、最貧地区は真っ黒に「塗りつぶされた」のだった。著者は、そんな地域とは無縁の世界に暮らすブースや彼のご同輩たちの貧困観を生々しく描ききる。

当時の社会で貧困層がいかに蔑まれていたのかを思い知らされ、それが今日にも繋がることに気づかされる好著。

『給食の歴史』藤原辰史

岩波新書

「もうすぐ掃除の時間がやってくる。ずっと座って食膳の上で一向に減らない給食をみつめる」（まえがき、i頁）。本書は給食で苦手な食材、メニューに当たった時、誰しもの思い当たる、あの居たたまれないシーンの描写から始まる。他方で、カレーやハンバーグが出た時の喜び、友人と給食を取り合った（時に分け合った）思い出も勿論触れられており、給食の歴史はまさに「私たちの歴史」である。ただし、本書は郷愁的な内容ばかりではない。本書は給食を、「子どもに対する直接的かつ集団的な権力行使」と「未来を構想する魅力的な舞台」として把握していく。政治、経済、社会、文化、地域が織りなす「給食の歴史」は始まったばかりである。

『自公政権とは何か：「連立」にみる強さの正体』中北浩爾

ちくま新書

日本では、政権選択選挙ともいわれる衆議院総選挙について、かつてのイギリスのような二大政党モデルに親和的な小選挙区制を柱とする選挙制度を導入して以来、二大政党の対立を軸に政権交代を繰り返すことが憲政の正しい姿であって、選挙時の政党間協力のあり方や選挙後の政権運営についても、二大政党制を前提とした議論がなされてきた。しかし実際には、「一強」のように見える2012年以降の自民党でさえ、公明党との連立抜きでは選挙での勝利も安定的な政権運営も困難であると言われている。本書は、最新の政治理論にも依拠しながら、日本における非自民連立政権以後のすべての連立政権を分析し、単純な二大政党制とは異なる政権交代のあり方について考察する。

『歴史は実験できるのか：自然実験が解き明かす人類史』

ジャレド・ダイヤモンド、ジェイムズ・A・ロビンソン編著

慶應義塾大学出版会

かつて「文系は実験しない（できない）」とされていたが、今日、経済学や心理学などでは実験を行うことは珍しくなくなった。他方で、歴史学は過去を扱い、史実の「一回性」を重視するため（＝歴史は「繰り返さない」！）、今なお「実験できない」ことが強調されがちな分野である。本書は、比較研究法（自然実験 Natural Experiments）に基づき、8つのテーマの、事実、機序、因果関係を検討した研究論文集である。例えば、世界の中でなぜアメリカで銀行制度が最も発達したのか（＝処置群 treatment）、メキシコ・ブラジル（＝対照群 control）との初期条件、史実を比較し、制度の帰結を明らかにしている。今や、歴史も「実験する」のである。

『社会のなかのコモンズ：公共性を超えて』待鳥聡史、宇野重規編著

白水社

本書は、「コモンズ」を共通項にして、法学者、政治学者、経済学者が集まり、現代の社会的・政治的課題について議論を重ねて編まれたものである。コモンズとは、中世イギリスに起源をもつ概念で、特定人に属さない牧草地などの自然資源を地域のコミュニティで共同管理する仕組みを指すものであるが、この概念には、ルールをみんなで守っていなければならないという責任の論理と同時に、出入り自由の開放性の論理も含まれているという。本書掲載の各論文は、具体的な場を介して人と人とを繋ぐコモンズ概念を用いて、住宅問題から政党や移民の問題まで、今日私たちが直面している課題について分析し、解決への道筋を示してくれる。



経済学科

SAITO KUNIAKI

齋藤 邦明

日本経済史



経済学科

TOKUNAGA TAKASHI

徳永 貴志

憲法学

比較憲法学



経済学科

HIDAI TAKEO
日臺 健雄
経済史

『資本論に学ぶ』宇野弘蔵
ちくま学芸文庫

皆さんはアルバイトをしたことがあると思います。たとえば時給千円のアルバイトに一時間従事すると、皆さんはその一時間を雇い主に「商品」として切り売りして、千円という「賃金」と引き換えに、その一時間のあいだ主体的な自由を失い、雇い主すなわち資本家の指揮下に入ります。そこでは、皆さんは労働者となり、「労働力」を「商品」にする立場になるわけです。この「労働力の商品化」こそが資本主義を理解する鍵となる概念だと唱えたのが、宇野弘蔵です。この本では、マルクス『資本論』を批判的に読み、科学的な部分とイデオロギー的な主張とを分ける必要性があることなどが、学生のインタビュー形式など読みやすい形で示されています。

『プレカリアート：不平等社会が生み出す危険な階級』ガイ・スタンディング
法律文化社

「プロレタリアート」という言葉をご存知でしょうか。ちょっと古めかしい響きがあるかもしれませんが、「労働者階級」のことです。しかし、正規雇用のサラリーパーソンも、非正規雇用でボーナスなしのパートタイマーも、同じ労働者階級になります。このように、「労働者階級」という概念だけでは、不安定な非正規雇用が増加する現代の資本主義を理解するには限界があります。そこで著者が提唱するのが、「プレカリアート」という概念です。これは、「不安定な」という意味の形容詞precariousと「プロレタリアート」とを合わせた造語です。この本を読めば、皆さんは格差社会を変革するためのツールを獲得することになるでしょう。



経営学科

IDE KENJIRO
井出 健二郎
会計学

『初級簿記教本』海老原諭
創成社

どこの本屋さんに行っても、簿記や簿記検定にかかわる本がたくさんあります。それはどうしてなんだろう…ひとつは、それだけ勉強する人や検定試験という資格を取りたい人がいるからです。もうひとつは、簿記をわかりやすく・定番の・決定的な本がないからです。同僚の海老原先生だから…というわけではなく、もしかしたら、簿記のベストセラーになるかもしれません。先生らしく「きっちり」した本ですが、これ一冊あれば、基本的な簿記はわかるはずです。入門簿記という科目は、経営学科の学生だけでなく、経済学科はもちろん、他学部の学生も多く受講しています。社会に出て、簿記…おカネの知識は必ず使います。一度は手にして欲しい一冊です。

『狭き門』アンドレ・ジッド
新潮文庫

「文通を200通以上」、高校3年間で都立高校の女子学生に書きました。彼女からの返信は180通程度。ただ3年間、一度も会っていません。部活で女子どころではないのに、逢いたくて仕方なかった、そんな時に逢ったのが『狭き門』です。若干宗教的で、女性が徹底した神への敬虔な信心ゆえ、他を抑制して「狭き門より入れ」という生き方をしています。主人公の男性を好きでいるのに、それを排他する。男性もそれがわかりつつも苦しい気持ちでいる。「逢えないけど、思い続ける」、そんなものが感情移入していたような。これが大学時代にも続く、恋愛に行き詰った時、コンスタン、ゲーテ、ツルゲーネフ…恋愛小説を読みあさる、始まりだったと記憶しています（笑）



経済学科

WACHI TATSUYA
和智 達也
農林業政策

『法隆寺を支えた木』西岡常一、小原二郎
NHK出版

本書ではまず法隆寺大工の西岡常一が語り、その語りについて建築学者の小原二郎が補足的な説明を加えている。本書がこうしたスタイルを採用したのには理由がある。西岡常一の語る言葉は一見飾りのない、素朴なものではある。しかしそれは時として玄人的な、普段から木に触れている人にもみ通じるような言葉でもある。本書ではそんな西岡常一の言葉を小原二郎が丁寧に、かつ研究者の視点から科学的に説明することによって、私たちの理解を助けてくれている。本書は本のもつ生命力の豊かさや、木の価値を損ねることなく建築に利用してきた先達たちの知恵の素晴らしさ、そしてその先達たちの知恵を後代に継承することの難しさを教えてくれる。

『日本刀の科学: 武器としての合理性と機能美に科学で迫る』
臺丸谷政志
サイエンス・アイ新書

ドラムの練習と並んで土偶や仏像、そして日本刀の鑑賞がここ数年のマイブームだ。思い起こせば小学生の時、社会科の授業で地元の広島県の山間部で過疎化が進んでいることを教わり、子供ながらに人々が住み慣れた土地で暮らせなくなることには何かしら「理不尽さ」のようなものを感じていた。その記憶が後々まで残っていたためか、大学の卒論では過疎地域を対象にすることになり、そのなかで玉鋼をつくる「たたら製鉄」の存在を知った。当時は日本刀そのものには興味はなかったが、いま顧みると、そのとき蒔かれた種が今頃ようやく芽吹いてきてくれたのかも知れない。本書は日本刀鑑賞のビギナーである自分にとって格好のパートナーとなっている。



経営学科

UENO TETSURO
上野 哲郎
IT マネジメント

『人工知能と経済の未来：2030年雇用大崩壊』井上智洋
文春新書

人工知能（AI）の発達が、経済・雇用の形態にどのような影響を与えるか、またAIが普及した時どのような形態を追求すべきかを論じたものである。汎用型AIの発展は、人間の労働の代替をもたらし、雇用の大減少をもたらす可能性が大きいと指摘。しかし、汎用型AIの発展は、産業革命以来の生産性革命であり、すさまじい経済成長をもたらすため、この流れは止められないとしている。結果として、失業者が溢れる社会が想定される、と指摘する。そして、このような社会における人々の生活を支える仕組みとして、ベーシックインカム（BI）を提唱している。これからの自分の生活に関わる問題を考える一助として読んでもらいたい本である。

『バチカンと国際政治：宗教と国際機構の交錯』松本佐保
千倉書房

バチカンが現代国際政治のなかで果たしている役割について記したものである。第一次世界大戦、第二次世界大戦から近年の民族紛争頻発まで国際社会の変動にカトリックの総本山・バチカンがどのように向き合ってきたのかを記したものであり、宗教と国際政治の関係に対する一つの視点を提供している。国際政治における諸問題を解決するには政治外交が重要である。この外交を行うのは、主として各国の政府や職業外交官であるが、この外交が行き詰ったとき、潤滑油的役割をバチカンがその影響力を行使し果たしてきた。また、現在も果たしつつある。このような役割は、対立が先鋭化しつつある現代の国際社会においては、なくてはならないものと思われる。

『ご冗談でしょう、ファインマンさん』
〈上・下〉リチャード P. ファインマン
岩波現代文庫

R.P. ファインマンはノーベル物理学賞を受賞した天才的な物理学者で、この本は彼の自伝である。難しい内容は全くなく、むしろ文系の学生に読んでほしい。彼はいつも好奇心をもち、とてもユーモラスで自由な生活をする人物である。考え方も先入観なしで、考えたことを何でも実行してみる。本の中にあるたくさんのエピソードは、私たちの生活で参考になる思考が多い。論理的な思考で、そして何でも物事を探求するという習慣がとても重要であろう。

『Rich Dad Poor Dad: What the Rich Teach Their Kids about Money-That the Poor and Middle Class Do Not!』
Robert T. Kiyosaki
Plata Publishing; Second 版

和訳版『金持ち父さん貧乏父さん：アメリカの金持ちが教えてくれるお金の哲学』もあるが、あえて英語で読むことをお勧めする。特に英語を勉強したい学生は、この本の英単語や文法がとても簡単で、日常会話にも役に立つ。内容もとても刺激的で、お金持ちになるために参考になる思考が多く述べられている。人生を教えてくれる貧乏父さんは本当のお父さんだが、金持ち父さんは友人のお父さんというストーリー。これからの人生設計に役立つ就職の目標、投資の手法そして資産運用の知識がたくさん盛り込まれている。続編の『金持ち父さんのキャッシュフロー・クワドラント』もお勧めだ。



経営学科
BAMBANG RUDYANTO
バンバン・ルディアント
防災地理情報システム



経営学科
HIRAI HIRONORI
平井 宏典
産学連携実践
経営戦略
アートビジネス

『幸福学』
ハーバード・ビジネス・レビュー編集部編
ダイヤモンド社

胡散臭い書名ですが、実は幸福学や幸福経営学という分野の研究があり、近年とても注目されています。誰もが幸せでありたいですね？ その幸せを探究している分野が「幸福学」であり、本書には様々な研究成果が載っています。幸せの研究の一例を紹介すると、人生のパートナーを見つける（結婚など）、昇進する、家を買う等は、驚くべきことに幸せにはそれほど重要ではないそうです。私たちにとって重要だと思われるようなポジティブな出来事も3ヶ月以上にわたって影響を与えることはほとんどないようです。

では、どうすれば私たちは幸福な人生を送ることができるのでしょうか。この本があなたにひとつの知恵を提供してくれると思います。

『空飛ぶタイヤ』池井戸潤
実業之日本社

本書は、自動車からタイヤが外れ、そのタイヤにあたって人が亡くなった実際の事故を基にしている。事故の原因は自動車会社にあるが、自動車会社は大企業で、中小企業の修理工場の整備不良のせいにしてしまう。修理工場は世間の批判にさらされ、倒産の危機に瀕する。現実にある大企業の横暴と中小企業の悲哀を読み取ってもらいたい。作者の池井戸潤はドラマ『半沢直樹』（原作は『オレたちバブル入行組』他）で大きな反響を呼び有名になったので、知っている人も多いと思う。ドラマで興味を持って、企業小説・経済小説を読むようになり、実社会の企業や経済に関心を持ってもらいたい。

『昭和浅草映画地図』中村実男
明治大学出版会

浅草はさびれたと言われていた頃がまるで嘘のように、一年中、観光客でごった返している。浅草寺へ通じる雷門も、参道の仲見世も、五重塔や観音様も、たいへんな賑わいである。この浅草も明治以降、浅草公園の誕生、市区改正、関東大震災、東京大空襲、高度経済成長などを経て、今日のような変遷を遂げてきた。本書は読者に、「この浅草がかつて東京一の盛り場で、先端的な街だったことをご存知ですか？」と問いかけ、「風景の記憶装置」としての「浅草映画」の解説を通じて、浅草の街の知られざる歴史を辿る。序章の後、どこを読んでも良いように工夫がなされ、どんな場面を思い浮かべるのかは読者次第。味わい深い価値の高い書である。



経営学科
SUZUKI IWAYUKI
鈴木 岩行
アジアにおける企業の経営



経営学科
TOMA MASAYOSHI
當間 政義
経営学

『神鷲（ガルダ）商人』深田祐介
新潮文庫

第二次世界大戦後、独立間もないインドネシアの政治・経済状況を、インドネシア・ビジネスに携わった日本人商社マンの目を通して描いた作品である。小説の形をとっているが、特定のモデルがいて史実に近いので、アジアビジネス、特にインドネシア・ビジネスに興味を持っている人は、スカルノ政権下のインドネシアの政治・経済状況を理解できる。それだけでなく、戦後復興期の日本の商社ビジネスについても知ることができる。テレビで見かけるデヴィ夫人が、（独立の英雄で、失脚するまで終身大統領であったスカルノ個人が大きな権力を持っていたからであるが）当時想像以上の大きな権限を有していたことも興味深い。

『株式会社の資本論：成長と格差の仕組み』亀川雅人
中央経済社

我われの社会の成長を助長する株式会社。この制度に内包する本質を捉えてみると、そこには資本という概念が重要なものとなる。同時に、社会の成長と発展のカギを握る資本でもある。しかしながら、この資本は社会の不安定要因あるいは格差の元凶ともなるといわれている。株式会社を論じるのは、それが資本を融合させる最高の企業形態であり、成長と格差を増幅させるメカニズムを内包していることが理由となる。株式会社に結合した資本は、また、国境を超えるグローバリゼーションの主演ともなり、世界の隅々まで成長と格差を伝播していくことになる。こうした背景から、本書は、諸学者にも実務家にも丹念に、しかも熟読する価値の高い書である。

**『連鎖退職』山本寛**

日本経済新聞出版社

経営学科

FUKUDA YOSHIHIRO

福田 好裕経営管理論
組織論
経営戦略論

人はいろいろな理由で一旦勤めた会社を辞めていく。介護等の個人的事情の場合もあるが、辞める多くの理由は仕事と金銭の問題だ。トップの戦略的失敗、財務上のミス等から赤字を出してしまい、今以上に仕事が忙しくなる一方で、ボーナスが減額され、昇給が見送られる。そのことにより、どんどん人が辞めていく。辞める人の多くは、ほかに行き場所のある、比較的若く優秀な人材である。働くことと報酬との関係がわかっていない経営者が意外にも多い。一旦、報酬を受け取って始めた仕事は、その報酬が減額されるとモチベーションが大きくダウンしてしまう。連鎖退職のスパイラルに入ってしまうのである。

『会計の世界史：イタリア、イギリス、アメリカ：500年の物語』田中靖浩

日本経済新聞出版社

ノンジャンルといっても専門に近いところから1冊。会計は勉強すると役立つそうだが、仕組みが複雑で、そもそも数字と計算が大の苦手という学生も多い。一方、会計や財務、財政の問題は、トップに関わる事項であり関係ないと考えるかもしれない。従業員は決まったお金の使い方を受け入れるしかない。ボーナスを減らすと言われればそれを受け入れるしかない。本書を読むと歴史をさかのぼってなぜ会計学が誕生し発展したのかよくわかる。そして圧倒的に面白い。優れた経営者はお金の使い方がうまい。お金の使い方下手な会社は、従業員のモチベーションの低下につながり、仕事の質が落ちていく。

**本を読もう！〔第5集〕**

きみたちに読んでほしい本を2冊あげると

2020年3月31日 発行

発行 和光大学附属梅根記念図書・情報館

〒195-8585 東京都町田市金井町 2160

TEL 044-989-7494

FAX 044-989-2250

＊『本を読もう！』第1集から第5集およびその他の図書・情報館の刊行物は
ホームページ(<http://www.wako.ac.jp/library/about/publication/>)でも公開しています。

＊紹介された図書は、原則として図書・情報館で所蔵していますが、多巻物は一部のみ所蔵、
また一部所蔵していないものもあります。



デザイン：秋葉シスイ